

令和2年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 22	公益目的事業 19
主査名	中村文彦 横浜国立大学教授	
研究テーマ	持続可能な途上国都市の公共交通計画論に関する研究	
研究の目的： <p>本研究では、これまでの新興国・途上国の都市公共交通政策に関する一連の研究成果をもとにして、対象地域を、アジア諸国、中南米やアフリカの、途上国地域全般でとらえ、SDGs への国際的関心を踏まえ、途上国の都市の持続可能性に貢献する公共交通の計画論を取り上げ、在来のバス、地域独自の中間的公共交通手段、急速に普及する新技術などの課題とともに、そもそもの交通戦略の基本的な課題までを取り上げ、これからの途上国都市の公共交通計画の課題を明らかにすることを目的に研究を推進する。具体的には、従前よりの継続課題である、アジア、アフリカ、南米の途上国での都市公共交通にかかるケーススタディに取り組むこと、途上国の都市交通にかかる文献研究を深度化すること、に加えて、公共交通利用の基本となる歩行者空間の重要性を踏まえた walkability に関する研究、大枠としての交通戦略については、1970 年代のトムソンの交通戦略の読み直しをもとにした、新時代の技術進化も踏まえた途上国交通戦略のあり方に取り組む。</p>		
研究の経過（4月～3月）： <p>新型コロナウイルスの影響もあり、例年より遅れ気味で、第1回をオンラインで9月10日に開催した。ラオスとベトナムでのケーススタディ経過を確認した。第2回は12月7日に開催した。ラオスでのケーススタディについては、BRT 導入時のパラトランジット再編の可能性の検討が紹介された。インドネシアでのケーススタディでは、アプリベースのオートバイタクシーの事例調査が紹介された。トムソンの交通戦略に関しては、低コスト戦略の考え方のレビューと途上国への適用について議論がなされた。途上国都市交通に関連する文献レビューについては、東アジア交通学会の論文集からいくつか紹介された。第3回は3月26日に開催した。ベトナムでのケーススタディは、公共交通指向型開発の導入可能性の評価方法についての議論がなされた。また同じくベトナムでのケーススタディとして、市民の自家用車やオートバイなどの個人移動手段への意識分析についての議論がなされた。加えて、バンコクの歩行空間解析についての文献紹介もなされた。</p>		
研究の成果（自己評価含む）： <p>年間を通して、途上国の都市交通事例として、ラオス、ベトナム、インドネシアを中心に、現地の交通事情の最新動向の共有、道路交通、バスやパラトランジット、そして歩行者についての多くの知見の共有、それらを題材にした実地研究成果の共有を行えた。昨年度の課題であった文献レビューについても、古典的なトムソンの交通戦略のレビューに始まり、最新の英文論文についても分担して情報共有することができた。年度を通して、当初の目的に対して一定の成果を得たものと考えている。</p>		
今後の課題： <p>途上国における道路公共交通にかかる検討については、上述のように今年度を含め、多年次にわたって研究活動を継続させていただき、ある程度の成果を得ることができたものと考えている。一方で、世界的にみると、シェアリング、自動運転をはじめ、新しいタイプのモビリティツールを活用した、新種のモビリティサービス事例が増えており、コロナ禍での都市活動形態の多様化を受けた移動ニーズの多様化とともに、交通サービス供給も多様化しつつある。加えて、スマートシティ等都市全体のデジタルトランスフォーメーションの動きも、途上国においても大きな注目課題になっている。これらの流れを踏まえて、今後は、スマートシティ、スマートモビリティ等をキーワードに、より幅広く、文献レビューとともに、各国の動向のフォローと学術的アプローチの課題を明らかにしていく必要がある。</p>		